

平成27年度

『まちづくり講演会』実施報告書

『つながりが作る新しい「社会」』

—少子高齢・人口減少社会における住民によるコミュニティ経営と行政の役割—



主催：富良野市

【開催趣旨】

現在、第5次富良野市総合計画の前期基本計画の5年目を推進している状況にある。

第5次富良野市総合計画の基本理念である「市民の暮らしを地域と行政がともに支えるまちづくり」「富良野の魅力や強みを生かし創造するまちづくり」、将来像である「安心と希望、協働と活力の大地『ふらの』」の視点から、まちづくりについて、市民・地域・行政・企業などがまちづくりに対し共通した認識のもと、共助・協働し進めて行くことが重要である。

日本創生会議・人口問題検討分科会（座長・増田寛也元総務大臣）は平成26年5月、全国の自治体のうち896自治体で、平成22年から平成55年までの30年間に若年女性（20～39歳）が半分以下に減ると試算し、「将来、消滅する可能性がある」と指摘しており、本市も例外ではない。

また、平成26年11月、まち・ひと・しごと創生法が公布に伴い、本市においても、今後の人口減少や少子高齢化対応するために、人口の現状と将来の展望を提示する「地方人口ビジョン」、地域の実情に応じた今後5か年の施策の方向を提示する「地方版総合戦略」を策定することとなっている。

今回の講演会は、人口減少社会における現状を認識し、今後の地域づくりをどう進めていくか、地方を元気にするために何をすべきかを地域全体で考えるものである。

- ◆開催日時 平成27年12月17日（木）午後6時30分～午後8時30分
- ◆開催場所 富良野文化会館 大会議室
- ◆講師 牧野 篤 氏（東京大学 大学院教育学研究科 教授）
- ◆参加者数 135名（市民・行政職員・市議会議員・沿線住民等）※事務局含む

1. 開 会（午後6時30分）

○司会進行：富良野市総務部企画振興課長 西野成紀

2. 主催者挨拶

○富良野市長 能登 芳昭

【挨拶要旨】

- ・平成26年5月に日本創生会議・人口問題検討分科会（座長・増田寛也元総務大臣）は、全国の自治体のうち896自治体で、平成22年から平成52年までの30年間に若年女性（20～39歳）が半分以下に減ると試算し、「将来、消滅する可能性がある」と指摘しており、本市も例外ではない。
- ・また、平成26年11月に「まち・ひと・しごと創生法」が公布され、本市においても、今後の人口減少や少子高齢化対応するために、人口の現状と将来の展望を提示する「地方人口ビジョン」、地域の実情に応じた今後5か年の施策の方向を提示する「地方版総合戦略」を策定することとなっている。

- ・この間、昨年・今年と地域懇談会において、人口減少対策を議題として取り上げ、市民から意見・提言をいただいたり、アンケート調査による子育て施策や定住対策など意見集約を行ったところである。
- ・庁内においても、女性職員や若手職員がそれぞれワーキングチームをつくって富良野市の今後について意見交換を行い、施策等についての意見や提言をまとめてもらった。
- ・また、産官学金労による富良野市総合戦略有識者会議を設置し、各分野の視点から検討を重ねているところである。
- ・第5次富良野市総合計画におきましても、平成28年度より後期基本計画がスタートしますので、前期基本計画を検証し、人口減少対策を含めた具体的な策定作業を進めているところである。
- ・今回の講演会は、「つながりがつくる新しい「社会」-少子高齢・人口減少社会における住民によるコミュニティ経営と行政の役割」と題し、東京大学 大学院教育学研究科の牧野先生より、ご講演いただく。参加された皆様には、今後のへ向けた取り組みの参考としていただきたいと思いますと考えておりますので、よろしくお願ひしたい。

3. 講演

- ◇講演テーマ：「つながりが作る新しい「社会」」
—少子高齢・人口減少社会における住民によるコミュニティ経営と行政の役割—
- ◇講師： 牧野 篤 氏（東京大学 大学院教育学研究科 教授）

【講演要旨】

I. 少子高齢・人口減少社会の何が問題なのか

1-1 高齢社会・少子化社会とはどんな社会なのか

- ・日本の高齢化率は約26%であり、世界第一位の超高齢社会である。
- ・将来的に日本の高齢化率は40%まで上がるが、それ以上は増加しない予測である。
- ・少子化社会とは、子どもの死亡率が低く、子どもを多くつくる必要のない社会であると言え、医療技術の高い安全な社会というプラスの要素もある。

→少子高齢社会とは、平均寿命が長く、子どもの死亡率も低い理想の社会という解釈も出来る。

1-2 なぜ少子高齢・人口減少社会が問題視されているのか

- ・少子高齢・人口減少社会の問題点として、社会の再生産が出来なくなることがあげられる
- ・社会の再生産とは人口が増え、国の生産力を上げていこうという従来の考え方（再生産モデル）で、この考え方を現在の社会に当て嵌めると、高齢者の割合が高いなどの批判が出てきてしまう。

→社会の再生産という考え方（再生産モデル）が現在の社会に合わなくなっているのではないだろうか。

II. これからの社会での生き方

2-1 日本の社会の変遷と現在の日本社会における新しい考え方（新しいモデル）

- ・昔の日本は、家族を基盤とした「共助」「社会」の時代だった。（社会中心の農業社会）
- ・その後、工業化に成功した日本は、家族や故郷から都市へ働きに出た「自由だが孤独な労働者」が増えていった。こうした社会は、人口が増えて税収も増えるので、政府は様々な公助が行え（大きな政府）、この頃に再生産モデルが生まれた。（政府中心の工業社会）
- ・バブル経済が崩壊し、グローバル化社会になると企業がどんどん海外へ移転していき、税収が減ったため工業社会の頃のように大きな政府ではいられなくなった。その結果、現在まで続いている「共助」や「公助」が後退した「自助」が求められる市場主義の時代となった。（市場中心の金融社会）
- ・金融社会の中で、人々は孤独を感じているが、行政サービスでカバーはできない。

→もう一度自分たちの足元を見つめなおし、自分たちのコミュニティをしっかりと作っていく必要がある。＝住民が「社会」を創造する。（持続可能モデル）

→行政に社会を作ってもらうのではなく、自分たちが自由に社会を作る、作る権利があるという考えを持つ。

2-2 これからの社会での生き方

- ・これからの社会の大きなテーマはソーシャル（社会的であること）である。
- ・過去の経済発展をしていた社会では、会社のために働けば景気がよくなり、国のためにもなり、自分の生活も良くなっていた。しかし、現在の日本でも同じことが言えるのだろうか。地域のコミュニティをつくり、そこでどうやって生きていくのかを考えていったほうが国のためにもなるのではないだろうか。
- ・小さなコミュニティから強くする（繋がりを持つ）ことが大切。
- ・公民館を趣味の共有の場としてだけでなく、人間関係や生活を豊かにする場として利用していったらどうだろうか。

→これからの社会では、人間関係の構築、繋がりが大切なのではないだろうか。

III. 日本の人口動向や経済構造の変容

3-1 少子高齢化・人口減少の衝撃

- ・日本は高齢化社会から高齢社会になるのに24年、高齢社会から超高齢社会になるのには12年という驚異的な速さで高齢化が進んだ。
- ・2060年には人口の4割が高齢者で人口の1割が要介護者になる予測がたっている。
- ・首都圏に集中する高齢者を地方へ分散させようとする人もいるが、それは難しいだろう。

→健康寿命を延ばすと共に、地域社会みんなが協力して生きていく社会を作っていく必要がある。

3-2 増田レポートの衝撃

- ・増田レポート曰く、地方からの人口移動が少子化に拍車をかけており、人口減少によって消滅してしまう可能性のある自治体があるという。

- ・増田レポートによって地方から大都市への人口集中が加速してしまうのではないかという批判が出た。（消滅可能性都市から消滅の危険のない大都市へ行ってしまおう。）
- ・増田レポートは消滅可能性都市といわれた自治体の住民のあきらめを誘発してしまうのではないか。（大都市へ移住してしまう）

3-3 地方は消滅するのか

- ・そもそも自治体の機能が低下しても「地域」は消滅しない。しかし、住民があきらめてしまうと、住民自治機能が崩壊してしまい、地域が機能しなくなってしまう。

→いかに住民が頑張ろうと思える施策を打ち出せるかが重要である。

3-4 自治を機能させるための拠点としての「学校」

- ・学校を核に地域コミュニティを作りなおせないだろうか。
- ・学校をただ廃校にするだけでは、その地域コミュニティを崩壊させてしまう可能性がある。

→学校を教育の場と捉えるのではなく、自治の拠点であり、社会を自立させるための場として捉える。

3-5 高齢者の地方移住について

- ・日本創生会議において「東京圏高齢化危機回避戦略」が打ち出され、後期高齢者と要介護者の集住化と地方移住を提唱した。しかしこれは東京だけが生き残るような戦略ではないかという批判がある。
- ・そもそも地方移住といっても高齢者の人たちが移住するのか。高齢者のことをきちんと考えているのか。
- ・東京、ひいては国家のシステムを生き残らせるためだけの施策に見えてしまう。

→制度やシステムを守る施策ではなく、もっと人に寄り添った、人の「生活」を守るための施策を考えなければならない。

3-6 経済構造の変容

- ・高度経済成長期では全ての産業が黒字だったが、現在は赤字産業が多く、一番の黒字産業である金融・保険業はあまり雇用を生まない。
- ・現在日本で働いている雇用者のうち、非正規雇用者の割合は4割を超えている。

IV. 社会資本を豊かにすること

4-1 地域の社会関係資本と子どもの関係

- ・少子化の対策として、3人目の子どもから手当を支給するという考えが出ているが、手当が出るから子どもを生むとはならない。
- ・金銭的な余裕があるにもかかわらず、子どもを一人しか生まない理由をお母さんに聞くと、「孤独を感じていて、精神的に余裕がないから」だと言われた。
- ・もちろん少子化の原因として貧困もあげられ、日本人の平均年収（約400万）の半分以下の年収の家庭に生まれた子ども割合（子どもの貧困率）は、約17%にもなる。これをシングルマザーに限定すると、子どもの貧困率は50%を超えてしまう。こうした家庭に手当を支給して子どもを産ませることは不可能。

- ・社会関係資本が豊かな地域は、子どもの非行が少なく、子どもの学力も高い。

→社会関係資本がしっかりしている事が子どもの成長の重要な要素の一つである。

4-2 地域の社会関係資本と自治体財政負担・人の寿命の関係

- ・何でも行政に頼る地域より、自分たちで出来ることは協力し合って行動する地域とでは当然、後者のほうが自治体財政負担は小さくて済む。
- ・孤立を感じていると身体の活力が低下する。幸せを感じている人のほうが寿命が長く、社会の緊張感が強い国の人間は寿命が短い。
- ・また、社会の緊張感が弱い国の人ほど健康寿命も長い。健康寿命が長いということは、医療費負担も小さくなる。

→社会関係資本がしっかりしている事は人の寿命や健康、自治体財政負担にいい影響を与える。

4-3 地域の社会関係資本と市場の関係

- ・人は「人の欲望を欲望する」存在→人を喜ばせたい等。
例：自分ひとりだけの食事だと簡素なもので済ませるが、友人や恋人との食事なら、きちんとした料理をつくったりして一緒に食べる。
- ・各業界の重役たちが会合を行った際に、「市場を分断しすぎた」と反省していた。

→人との繋がりを大切にした市場のほうが持続できる。

V. キャリア教育について

5-1 21世紀型スキル

- ・小学校入学生の65%は、大学卒業後、今ない仕事に就くといわれている。
- ・2030年には、今ある仕事の半分以上が自動化され、雇用が減ってしまう。
- ・つまり、今の子どもたちに対して、自分たちの生き方をそのまま教えることができなくなっている。
- ・しかし、豊かな人生の作り方は教えられる。

→地域コミュニティをベースにして、子どもたちに「協力して新たな社会を作り、豊かな人生を作る」ことを教える。

5-2 具体事例：島根県 海士町～隠岐島前高校

- ・地域創造コースという、地域のために働くことを目指すコースをつくった。
- ・普通科高校なので、商業高校のようなカリキュラムは組めないため、放課後に子どもたちが、常時インターンシップを行って様々な活動が出来るように、地元の経済界と連携を取れるようにした。
- ・さらに、空き家を利用して公営塾を立ち上げて、子どもたちに社会人としての基礎能力（具体的な将来構想を書けるようにするなど）を教える場とした。塾講師は、大企業で人事をしている人間を勧誘して雇っている。

→子どもたちは具体的な人生設計が立てられるようになり、公営塾では論文の書き方も教えるため、進学率も向上した。

→キャリア教育の成功事例として国や県がモデルケースにしている。

5-3 具体事例：長野県 飯田市～長野県飯田OIDE長姫高校

- ・子どもたちと公民館が連携して地域の諸課題を解決していくプログラムを作り、子どもたちに自分たちが主体となって地域を活性化させるという意識を持たせた。
- ・その結果、地元の人たちと共同で出資して会社を立ち上げる子も出てきた。

VI. 地域と行政の連携

6-1 事例：千葉県柏市

- ・学区ごとに高齢者と子どもたちが交流して様々な活動をする取り組み。
- ・活動拠点は空き家を改修して利用している。
- ・この活動を行った結果、子どもたちが挨拶をしてくれるようになり、放課後に活動の拠点に寄ってくれるようになった。
- ・このコミュニティの評判が口コミで広がって、子育て世代が引っ越してくれるようになった。

6-2 事例：愛知県豊田市

- ・就農を目的として若者を呼び込むのではなく、農業をベースにした環境配慮型の新しいライフスタイルを打ち出して都市の若者を呼び込むことを目指した。
- ・2年半で10人の若者が定住し、その中で結婚する若者も出てきた。
- ・そうした評判が広がり、子育て世代の夫婦が引っ越してくるようになった。

VII. まとめ

- ・社会資本を豊かにすることで、豊かな人生、暮らしやすい世の中を作り出せる。
- ・行政は税金という形でお金を集め、事業を行うことでみんなに分配し、住民は行政に様々な要求をするというのが従来の行政と住民の関係だった。しかし今後は、住民がコミュニティを形成して新しい社会を作り出し、行政がそれをバックアップするという関係をもてないか検討するべき。

4. 質疑応答

Q：富良野市のように、ある程度規模の大きい自治体の住民が作る小さなコミュニティは、学区が基準になるという考えで良いだろうか。

A：国は学区がコミュニティの基盤だと言っているが、まずは10人、20人のさらに小さなコミュニティから始めてもいいと思う。活動の中でどんどん他の人を巻き込んでいけば良いのではないかな。

5. 閉 会（午後8時30分）

【参加者状況】 ※事務局員含む

○参加人数（135名）

- ・富良野市 113名
- ・上富良野町 3名
- ・中富良野町 12名
- ・占冠村 6名
- ・その他（砂川市） 1名

○参加率

- ・富良野市内 84%
- ・富良野市外 16%

【アンケート集計】

○回収率

- ・62%（回収者数80名／参加者数（事務局除く）130名）

○年代構成

- ・20代 8名（10%）
- ・30代 10名（12%）
- ・40代 19名（24%）
- ・50代 20名（25%）
- ・60代 14名（18%）
- ・70代以上 8名（10%）
- ・無回答 1名（1%）

○今回の講演会は参考になったか？

- ・参考になった 73名（91%）
- ・参考にならなかった 0名
- ・どちらでもない 1名（1%）
- ・無回答 6名（8%）

○今後、講演会に参加するか

- ・参加する 62名（77%）
- ・参加しない 0名
- ・内容による 15名（19%）
- ・無回答 3名（4%）

○講演会の感想

- ・「コミュニティ」という言葉の意味が、少し理解できたような気がする。（50代）
- ・今、まさに人口減少社会のまっただ中にいる事がわかった。また、人口減少社会は1970年代から予想された社会だったこともわかった。政府が主導となって、人口を減少させない取り組み、高齢化社会の仕組みを根本から変えなければならないと思う。（70代以上）
- ・もう一度、この種の講演会を通して正面から考えるため、理解を深めるべきだ。（60代）
- ・社会教育の重要性を改めて感じた。地域コミュニティ再形成する上で人とのつながりを大事にしなければならないと感じた。（40代）
- ・新しい社会がやってくると感じた。自分が教えられることは役に立たないかもしれないが、明るく小さなことでも行動を起こしてやってみること。人とのつながり、コミュニティが地方の武器になると思った。（30代）
- ・ひとつの理論、ひとつの考え方として参考になった。金銭的な余裕がある範囲内で、できることをする必要性については納得できた。（50代）
- ・地域のコミュニティが地方の自立につながる。そのことが地方創成の実現となることに異論はないが、理想論なのではという心配もある。（50代）

- ・ 少子高齢社会も、考えようだと感じた。(50代)
- ・ 地域住民との連携の重要性を再認識した。(40代)
- ・ 国は、三大都市圏の高齢者(介護者)を地方へ移住させようとしているが、人口減の地方は受け入れることが、どのようなメリットがあり、またデメリットがあるのかが重要であると感じた。(40代)
- ・ 全国どこでも共通の課題で、解決も非常に難しいものだと思った。(40代)
- ・ 行政にたよらない地域住民によるコミュニティづくりが大切と感じた。(60代)
- ・ わかり易い説明。高齢化社会としての全体像を考える事ができた。マスコミの報道が、もう一考する事を違う方向で見る市の重要性を考えた。(60代)
- ・ 今後の目指す地方創生の例の数々が紹介され、多いに参考になった。(70代以上)
- ・ 非正規雇用者達は結婚も子供も持てない。まずそういう事を考えるべき。少子高齢化はずっと以前から言われてきているのに、今になって慌てている。国も市も国民も手をこまねいていたのだと思う。講師の声がよく聞こえなかった。(70代以上)
- ・ お金を回さなくても、いい社会ができるのか。できたら素晴らしいと思う。(30代)
- ・ 地域社会の結びつきを強めていく取り組みが重要であり、富良野市もそこからスタートしていくべきだと思う。(50代)
- ・ 講演を聞いて新たな発見があった。自治体職員でいると、考え方が固定化しており新しいアイデアがなかなか生まれにくい状況にあった。感謝する。(40代)
- ・ 人口減少対策、地方創生には、子どもを増やしていくことが重要だと思っていたが、高齢者の活躍において変わっていく社会のあり方を学ぶことができた。地域のあり方について考え方が大きくかわった。(20代)
- ・ 地方へ人を呼び込むための取り組みについて参考となった。補助金等による財政的な援助も大切であるが、それよりも地域コミュニティを創ることにより、IUターンにより有能な人材が確保できる。1つの考え方として自分たちの町で何が出来るのか考えたい。(30代)
- ・ もっと聞きたかった。時間がたりない様な。(50代)
- ・ 人口減少社会への対応で地域のコミュニティが大切なのはわかるが、それ以前に家族のコミュニティの方が大切ではないのか。2世代、3世代協力で生活、介護等をする地域社会を作っていく事。我がまちを何とかしたいと思ってもらえる子供達を育てる社会(コミュニティ)を作ることが必要。学校教育の分野と考えるのではなく、まち全体の取り組みとする必要がある。こらからの人口減少社会で、新しい社会を作る(地方を創生する)のは、今の大人達でなく、今の子供達。大人がおしつける社会ではない。ふらのも子供達がまちづくりを真剣に考えられる社会づくりに大きな転換が必要ではないか。あらゆる学びの場をまちづくりとして考えて、様々な体験を子供達にさせてあげたいと思う。(40代)
- ・ 前段の社会の変化を共助、公助、自助で言い表すことは流石である。そうしたところからほぐされて、自治を考える機会となった。実践事例も紹介され、豊かな生き方を考えさせられる機会だった。(40代)
- ・ 事例紹介が良かった。(70代以上)
- ・ 東山地域のコミュニティを「子どもに誇れる地域にしたい」と考えている。地域住民の意識を変える小さな取り組みを行政の力を借りながら進めたい。(60代)
- ・ 人口が減少しても、存続可能なまちづくりを。(60代)
- ・ 自分の暮らす地域を良くしていきたい。(60代)
- ・ 自分たちの世代がこれからの将来をまかされていることを改めて感じました。(20代)
- ・ 行政職員が何かを市民のためにやるのではなく、市民が主体となることができるような街づくりが必要だし、それをサポート、一緒に参加していけるようになっていきたい。(20代)

- ・地域総がかりの子育てが必要と改めて認識できた。(50代)
- ・これからのコミュニティ(社会)をどのようにしていけばよいか、とても参考となりました。運営された皆様、ご苦労様でした。(50代)
- ・講演を聴いて、高齢社会に少しはかかわっている事が分かりました。(60代)
- ・今、協会病院の産婦人科がすこぶる評判よくない。(前よりは少しマシらしい)行政でどうにかしてほしいと思っていたが、今から立派な人材を地域で育てようと思った。(50代)
- ・講演がすばらしかった。おつかれさまでした。(60代)
- ・海七町の様に島で船がしけで止まる様な不便な町でも、北海道からも移住(若い人)している町へ行ってみたいと思った。(60代)
- ・高校もがんばろうと思う(40代)
- ・前半理論編は難しかったが、実践編はおもしろかった。富良野にある豊かな自然や、開拓でつちかった技や力など、たくさんある宝物を皆で大事にすれば何かできそうだった。行政そのものの「学習」化、バックアップを行政がという話、市長さんも聞いていたので心強かった。(60代)
- ・人口減少の具体的な因果など教えて頂き、よく理解できて良かったです。(30代)
- ・広い視野で社会をとらえ、小さな社会で地に足をつけて生きていく。(20代)
- ・この種のテーマの講演を初めて聞いた。今後ともこれを念頭におき、勉強、実践とけんさんを進めたい。この講演の企画、実施に感謝する。(70代以上)
- ・「人口減少は止められない」を前提に対策を考える必要があると思っている。増加なんて現実的でない。隣町から(沿線町村)、人が移っても人を取り合っても、何が変わるのかと思う。移住してもらおうなら大都市からでないと。それよりも、住民にあきらめられずにすむ子供達に、進学後戻って来たいと思ってもらえる地域になるために、「住民が中心となって」まちづくりをやっていかないと、のりこえられない。社会教育の重要性が語られたので、今日の参加者に、理事者にもっと伝われば良いと思う。特に住民の皆さんに。(30代)
- ・人と人のつながり、小さいコミュニティの大切さ、社会参加→楽しい→いきがい→健康、行政→住民ではなく、住民→行政。(40代)
- ・先進事例の紹介も含めて、とても参考になった。地域でやれることから始めたいと思わせられた。(20代)
- ・個人の考え方で変えられることがわかった。地域で守っていく、創っていくことが、これからの日本を変えていけるとわかった。教職としての役目を果たしたい。(20代)
- ・コミュニティづくりの大切さが良くわかった。私も牧野教授の考え方に共感でき、もっともっと話を聞きたいほどだった。少子高齢・人口減少については、「高齢者が多いのは問題なのか」といった問いかけが印象に残り、確かにアフリカの現在パンデミックが幸せかと言われると、とても幸せであるとは思えなかった。ニュース、新聞、社会として、少子高齢化は悪であり問題であるという意識付けがされていたように思い、視点を変えて見ていくことが必要であること、重要なことを思い知らされた。私は市職員だが、日頃からの地域活動を大事に、職員が中心となり発展出来るように努力する。(20代)
- ・今住んでいる大人達がこの土地に長く住めないと言っているのに、若者達が住み続けられるわけがない。今いる大人達が諦める姿を見せている。若者達は当然にその土地から出て行ってしまうと思う。若者ではなく、大人達がもっと元気にならないと未来はない。(不明)
- ・「昔」に戻ることが必要ではないかと思った。(その時代に生きていないのでよくはわからないが)大家族への補助や医療の充実、不要な補助金の廃止が必要だと思う。(20代)

- ・富良野を知っている国民も高齢化している。「富良野ブランド」を使えるうちに、新たなシカケが必要。国がつくる枠組内の標準的な行政ではなく、「おもしろい」「カッコイイ」「楽しそう」をキーワードにしたらどうか。市役所にいるクリエイティブな発想をもつ職員を、管理部門においていくのは、モットイナイ。(30代)
- ・人口減少対策とは、どのような対策か。(50代)
- ・住みたくなるまちづくり。子育てしやすい環境をつくる。(50代)
- ・地域のコミュニティの重要性が良くわかった。とてもわかりやすかった。(40代)
- ・学校単位のコミュニティに対して意識を向けた事が無かったので新鮮だった。(30代)
- ・様々なモデルを聞いて大変参考になった。子供に焦点をあてることを検討するキッカケになった。(40代)
- ・子どもや高齢者が社会参加できるような取り組みが地域の存続につながる事がわかった。しかし、後半に色々な事例を紹介していただきましたが、かけ足になってしまい、よく聞きとれなかったのが残念。(50代)

